

執筆随想録
・平成二十一年四月十四日
隠れ切支丹の里 たなか踏基

私は、次作はぜひ時代物の長編をと念じてきた。

キリスト教の先駆的思想家新島襄、内村鑑三は共に上州人である。このような明治の先人が、上州を故郷にしているのは何故か。安中藩や高崎藩の近く、松井田は切支丹大名の高山右近の滞在地であったという。加賀藩前田利家、利長の代、能登に右近が居たことは知っていたが、松井田の存在は初耳だった。

前著「奇妙な羽衣伝説」執筆で富岡市を訪れたこともあって加賀藩分藩の七日市藩を舞台に選んだ。史実収集の取材に入る前に先人諸作品を乱読した。

殆どの読者の先祖は、額に汗して働く民衆なのにもかかわらず日本人は「侍好き」であるようだ。NHKの大河ドラマは、戦国時代から近世始めの武将が幕末の志士で、平成二十年度は宮尾登美子原作「篤姫」で、女性の視点でみた幕末の「侍」を描いている。

激動期を生きた篤姫、後の天璋院は江戸城明渡しに際し、大奥千二百人の無事と無血開城に尽力した人物の由。波乱の人生途上で明治維新の志士西郷、勝、大久保等「侍」と出会いながら、勇気を持って自分で決断し行動していく女性として描かれている。

捕物帳では警察機構の奉行、与力・同心が主人公であるがやはり「侍」である。農民が侍に憧れて剣客として目覚め眺ね上がった殺戮を繰り返した「新撰組」の近藤勇、土方歳三は「侍」として名を歴史に残した。定番の「中心蔵」然りである。

藤沢周平や池波正太郎の描く人物は全て「侍」である。民衆を描いた時代劇も確かにある。野村胡堂「銭形平次」や池波正太郎「鬼平犯科帳」であるが、時代は全て江戸時代である。あるべき日本人像として、江戸時代の正義感強く礼儀正しく人情に厚い、毅然とした侍精神が作品に色濃く反映している。

ひと頃、「〴〵の品格」の著作がベストセラーとなつた。

英語で言えばロマンチックであろうか。辞書に威厳、尊厳、品位、気品とある。そうした「侍好き」の反面、落語に登場の日本人ルーツは江戸っ子気質に有るらしい。明け拓げで喜怒哀楽が激しく、その癖女々しく虚勢を張り、宵越しの金は持たねえ」と啖呵は切るが、それは弱いからである。そこに現代失われつつある庶民の江戸仕草という文化があるという。

加賀百万石の大藩から西上州に立藩した一万石の小藩、七日市藩には知られていない秘密があった。

物語は、シーボルトとの密通疑獄の高橋景保の捕縛を皮切りに、事件に連座し長崎出島の通詞稲部市五郎種昌が、永牢申渡されて唐丸籠で七日市藩に護送されて来る描写で始まる。在牢の市五郎が十一年後、獄死した実際の史実に基づき構成している。

加賀藩から七日市藩に転籍した薬事御番頭の宮脇一之丞と、赤毛の倅一馬(竜吉)が主人公である。本妻のお美代には子ができない。一馬は、一之丞の外腹の子、然も京の碧眼の美女、お筆の間の混血児である。廻りに本多重兵衛、高山権乃進の个性的な人物を配したが、一之丞と一馬(竜吉)父子を、前著『奇妙な羽衣伝説』登場の宮脇家の先祖としても、読者に想起して戴ければ幸いである。主人公宮脇一之丞父子の生い立ちと、立藩からの藩主の秘密、市五郎死後中之条と甘楽郡界限に何故医師が輩出したのかという疑問に込める形で進められている。

主題は古くて新しい「父子の確執と苛め」であるが、伏線に隠れ(○転び)切支丹の受難がある。長崎は異国文化流入の門戸で、宗教一揆のあった島原・天草に近い地であり、転び切支丹や混血児が多く存在した地であると聞く。侍の父と任侠に憧れる倅の対立感情を描き、父子間の愛情は互いに別の男の美学を求めて擦れ違ふ。江戸の蘭学塾で、赤毛の故に一馬は塾生の侍の子弟から苛めに逢う。夷狄を嫌う

攘夷風潮を子供の世界にみるのである。赤毛の一馬

は旗本や御家人の子弟の塾生にとって正に夷狄であろう。夷狄とは異民族を卑しめ、軽蔑して敵意をもつたりして呼ぶ時に使う言葉の由。強くなるうと一馬は権乃進から礮投げを習う。父の蘭薬処方の技の牙えを権乃進から聞かされれば聞かされる程、倅一馬は屈折して父を離れて長崎に墮ちる。

加賀の家を離れ江戸で蘭薬調査を天職とする父は、仕事こそ男の美学と理解しているが、労咳の母から見たら迷惑の極み。養母お美代に育てられた六歳の倅に蘭学を強いた結果、一馬は塾生に苛められ挫折する。それが倅をして、江戸浅草で任侠という別の男の美学に向わせてしまふ。蘭薬一筋の父の眼からみた一馬を、無頼の輩から切放すために中之条の菓草園で修行させようと計る。この実直に見えた菓草園の当主は実は峠の弥吉と呼ばれる任侠の男。

廻りで、はらはらと二人の間に入って調整しようと骨をおる善人がいる。バイ・プレーヤーの本多重兵衛、高山権乃進であり時に、粟津の女将お房、四方の博徒で峠の弥吉である。京の阿蘭陀宿の村上文蔵、そして元七日市藩の侍から商人に転身の保坂雅次郎、何時の時代も己の大切なものを無くし報われずとも、魅力を放つ男を支援し共鳴する人々がいた。そんな江戸時代の人々をぜひ描いてみたかった。

サヴァン症候群(savant 白痴天才)とは、特定分野にのみ驚くべき才能を発揮する人達のことを言う。サヴァンとは仏語で「賢人」の意だという。知的障害や自閉性障害のある者のうち、極特定分野に限って常人には及びも付かない能力を発揮する者を指す。左脳損傷で、右脳を異常に発達させた結果という。通詞稲部市五郎は、後天的サヴァンだったのであるまいか。ふとそんな想いに駆られる。永牢で極端な自閉的境遇に置かれ、足の筋肉が萎えた結果、長崎で学んだ優れた蘭語とシーボルト譲りの外科医術の

記憶を甦らせて発達させたと考えられる。七日市藩の藩医にそうした能力が伝わる。そんな境遇にいる入牢の市五郎を、竜吉は受けた市五郎の恩義に報いるために、護送途中に奪還しようとする。

シーボルト事件に連座で、永牢申渡された市五郎は、長崎から七日市藩に護送されたが、十一年間揚がり屋(牢)で過ごし獄死した。取材してみると、幕府検死官を迎えた時の食事の献立から、持たせた土産の記録が残されているのには驚ろかされた。推定の域を出ないが、在牢中は何の音沙汰もなかったのに、獄死が判明するやあれこれ言ってきた、高橋景保の例を踏襲し、饗応される検死官の無神経ぶりを揶揄して残したのであるうか。何時の時代にもあるお役目を笠に着て権力を行使する幕府役人の嫌らしさを暴露しての記述だったと思われる。

藩主は幕府検死官が去った後、市五郎の死を悼み無許可で墓を建立する。罪人の埋葬はおろか、墓を建てること等は許されない時代であった。幕府検死官が去った後、幕府の命に敢えて逆らう藩主の思念は、何処にあつたのか？その後中之条と甘楽郡に何故医師が輩出したのか？立藩時から反体制的な思念を抱いていた節があつたと、考古学者の今井幹夫氏の指摘に興味をおぼえた。そんな七日市藩の秘密に、史実に基づき迫ってみたかった。

切支丹が潜伏する沼田藩にお預けの身の保坂雅次郎が長崎に赴き、伴天連や教徒の受難の凄まじさに触れ、文蔵に見出されて侍を捨て、商人になるのだが、その裏にある史実に実際に触れてみたいと当初長崎にも取材に赴く積りだったが、鳴滝のシーボルト記念館の方から戴いた資料を参考にした。シーボルト来日数十年前、薬草採取目的でツンベルグが長崎にきて、出島に菜園をつくっているらしい。

隠れ切支丹という言葉に、生月島や五島に身を隠して信仰に殉じた人々を連想するであろう。所が上

州と武州にも隠れ切支丹がいたという二冊の本に出逢って、語の底流に隠れ(転び)切支丹を想起させる筋立てとした。つまり、市五郎は転び切支丹で混血、倅宮脇一馬も同様に混血であると想定したのである。本一つは「群馬の隠れ切支丹」(田中澄江著)、他は「山里の殉教者たち」(北沢文武著)である。「群馬の」は、上毛新聞刊で絶版だったので、群馬の知人を通じて必要箇所をコピーして戴いた。さきたま出版会「山里」は地元図書館より借り出した。両著の記述内容に思わず惹き込まれた。

隠れ切支丹の里は、旧真田領の沼田藩川場村界隈と、上州と武州県境を流れる神流川流域にあつたという。両地に殉教の切支丹が隠れて暮らし、現在も墓が残されている。然も神流川界隈の切支丹は、京や江戸の潜入者も居たらしいが、沼田出身で元侍や医師の帰農者であるらしいと。長瀬町と皆野町境界の出牛峠は、デウスが訛ったという説があると。

沼田領川場村前組の名主八右衛門が提出した元禄十六年の「古切支丹類族失存命帳」には、幕府より指名手配を受けた「東庵」なる布教師ブルマンの存在が記載されている。「東庵」は足尾銅山の金鉱夫だったが、沼田戸神の人夫として潜入し主導布教した由。同時期、真田伊賀守(信利)の家臣に転び切支丹の高野甚五左衛門しんごさえもんがあり、布教に関与していたらしいと。多野郡浄法寺(現藤岡市鬼石)の神流川の善明寺河原で、古切支丹が処刑され清らかな神流川を血で染めたという善明寺伝説は作り話らしいが、「切支丹宗門史」に上州の記述があり存在は確かだったと。

奥利根川場村は、石仏の多い所である。最もよく知られている石仏に、子育慈母観音像がある。ペーブルを被り赤子に乳を含ませるその姿は、まるで長崎の生月島なまつきにあるマリア観音を思わせる。奥利根地方には、信州高遠の石工が入り込み様々な「冥土の神々」の石仏を刻んでいる。渡瀬村から北東二キロの池田

村観音堂、秩父金昌寺、新治村にもマリア観音を思わせる石仏があるし、月夜野の後閑には、切支丹の騎士像を思わせる石仏が存在するというのである。観音は元々男性で女性ではないという。マリア観音の存在は奇妙である。赤子を抱き乳を含ませる姿、女性的な姿態や表情は慈愛に満ちた母である。

二月末鬼石おにいしに行った。多野郡鬼石町は最近合併して藤岡市になった。工務店の会長に道案内を依頼し同町浄法寺の事務所を訊ね、家内同道で神流川流域の隠れ切支丹墓の探索に出掛けた。

真意の程は定かでないが、渡瀬村、神流川流域対岸の元西武化学の河川敷が広がる辺りは、善明寺河原と言い、血を染めた切支丹の処刑跡だった由。譲原の満福寺の山門にお地藏様と如意輪観音があり、お地藏様の錫杖に十字架が刻まれ、観音はマリアのような容貌であった。丘の中腹に切支丹とおぼしき墓が並んでいた。この寺には西洋人の顔を有する達磨図と、「泰西王侯図」と称し王冠を被り鎧を着けた騎士の絵があつたという。国指定の重要文化財の二枚の南蛮絵共に、現在高崎市岩鼻の県立美術館に移管された由で実物を見られなかった。

鬼石から埼玉県に入り、池田村に赴く。本によるとこの観音堂に黒いマリア観音に似た像があるとのことだったので出掛けてみたが、建屋の中にあるらしく実際の像は拝めなかった。

神流川は県最南端の上野村、三國山に源流を發し、埼玉と群馬を分ける河川である。途中下久保ダムで堰き止められ、直下の流域は、三波石峡と呼ばれている。合流する三波川とともに、庭石(青緑の変性岩)の産地として有名である。鬼が放り投げたという巨岩や奇岩。鬼石は、冬に咲く寒桜と三波石で知られる場所であるが、隠れ切支丹の里として知られている。江戸時代は、役人もめつたに出来ない秘境の地であつたであろうか。

了